

刊行の辞

『一橋社会科学』の船出にあたって

一橋大学大学院社会学研究科長 渡辺 治

この度、一橋大学大学院社会学研究科の紀要として、『一橋社会科学』を刊行することとなった。年三回刊で刊行するつもりである。

本研究科の紀要を、『一橋社会科学』と名付けるには、さまざまな議論があった。社会科学を一研究科、一学部が「僭称」することはいかなものかという躊躇もあった。そこで、紀要の刊行にあたり、なぜこんな「大それた」名前を付けたのか、その理由を説明する形で、本紀要の性格や抱負を明らかにしたい。

一橋大学大学院社会学研究科は、ディシプリンベースの総合社会科学専攻と、イシューベースの地球社会研究専攻という、相互に特色ある二専攻からなり、深い専門と専門を越えた先端的イシューの研究という二つの形で社会科学の発展をはかろうとしている。すなわち、総合社会科学専攻では、社会学、国際社会学、社会調査、社会思想、社会哲学、社会文化、社会人類学、社会地理学、社会心理学、教育社会学、スポーツ社会学、政治学、社会政策・社会保障、労使関係論、社会史、などの諸学を研究、教育している。他方、地球社会研究専攻においては、地球共生論、相関文明論、越境移動論、平和社会論、地球情報論、地球市民論、国際協力論、地球環境論、

地球社会特論などを基幹講義群に配し、グローバルな問題群を多面的な角度から研究、教育している。ほかに、本研究科では、ジェンダーや労働など、これら学問分野を横断する領域の研究、教育にも携わっている。社会学部では、社会学研究科のこうした学問分野や問題群を基礎に、学生諸君に、広範かつ多様な講義を提供している。

本研究科は、これまで、こうした多様な領域にまたがって、精力的に研究、教育を進めてきており、学界にも大きな貢献をしていると自負しているが、個々の研究者、研究者集団の活躍に比して、研究科が一体となつてとり組んできた営みや研究成果を発信する点では、必ずしも自覚的とはいえなかった。本紀要は、こうした研究科の営みを全体として社会に発信することにより、その成果を社会に還元するとともに、社会学研究科のアイデンティティを、より強くアピールしようという思惑にもとづいて刊行するものである。

その際、上記のような社会学研究科の広く多様な研究領域を表現するには、「社会科学」という名を冠する以外にないと考えた。一橋大学自体が、その「研究教育憲章」において「社会科学の総合大学」と謳っていることにかんがみれば、その中の一学部が「社会科学」を名乗るのもややおこがましい気もするが、本研究科の野望も加味して、あえて、「一橋社会科学」と名乗ったわけである。

*

以上のような創刊の趣旨から、本紀要では、教員や院生諸君の旺盛な個別研究を掲載することと同時に、社会学研究科の協同的な営みを、積極的、かつ系統的に取り上げていくつもりである。そのため、年三回刊の紀要のうち、一号は、特集号を組み、社会学研究科で行われている共同研究、教育プロジェクトの成果を公刊する場としたい。本研究科の総合社会科学専攻では、二〇〇〇年度より先端課題研究と題して、現代的な課題について、さまざまな分野の教員が専門学問の壁を越えて参集し、そのテーマについて共同で研究すると同時に、それを双

方向的な授業として、教育カリキュラムに組み込んできた。そのテーマは、初年度から順に並べると、「変貌する企業社会日本」「福祉国家と新自由主義」「視覚表象と文化的記憶」「戦争と民衆——戦場・銃後・伝承」「新しい市民社会とコミュニティ」「人間—環境関係の理論と展望」「日常実践・方法としてのジェンダー」などである。こうした取り組みも必要に応じて、特集に反映させていきたい。また、地球社会研究専攻の取り組んでいるテーマや、両専攻を横断するテーマについても特集に組んでいきたい。

*

以上のような趣旨と内容で、『一橋社会科学』はスタートした。創刊号である本号では、巻頭に、社会学部、社会学研究科の学問を論じた本学名誉教授安丸良夫氏の論稿「社会学部の学問を振り返って」をいただき、また特集には、「新しい市民社会の諸相」と題して、先に紹介した先端課題研究「新しい市民社会とコミュニティ」の中間的成果を発表した。本紀要の船出にふさわしい内容と体裁を備えることができたと自負している。読者の旺盛な批判と検討を期待したい。